

キャラクター名  
ヨアケ

プレイヤー名

シンドローム	ノイマン ウロボロス	ワークス	FHチルドレンC	カヴァー	抵抗勢力「アトランティス」
オプション	キュマイラ	年齢	13~15	性別	男
覚醒	感染	衝動	恐怖	初期侵食率	35%
出自	安定した家庭	経験	実験体	邂逅	欲望：居場所

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	28
肉体	1		0			1	行動値	8
感覚	1		0			1	(非装備時)	8
精神	5	1	0			6	戦闘移動	13
社会	1		0			1	全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	5		交渉		
回避	1		知覚			意志	1		調達	8	
運転：			芸術：			知識：			情報：FH	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：噂話	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
槍	
コネ：噂好きの友人	
ウェポンケース	
ストレンジフェイス	

合計装甲： 0    合計回避： 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイム	消費
業師	P	N		
—	P	N		
一色龍子(ひいろ ちょうこ)	P 好奇心	N 恐怖		
2年前の人達	P 尽力	N 悔悟		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 18    残り財産P: 4

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
コンセ：ウロボロス	2	2	メジャー	—	—	シンドローム	—	
効果： C値-2								
原初の赤：ダンシングシミター	2	3+1	メジャー	視界	—	RC	—	
効果： 所持している白兵武器をLv個まで選択、「攻撃力+[選択した武器の数×3]」の射撃攻撃を行う								
竜鱗	2	3	リアクション	至近	自身	自動	—	
効果：他のエフェクトと組み合わせ不可、あなたへの攻撃に対するリアクションとして使用、その攻撃は命中する代わりにあなたの装甲値を+[Lv×10]してダメージを算出、その装甲値は他の防具と重複する								
衝撃相殺	2	—	常時	至近	自身	自動	LIMIT	
効果：《竜鱗》を使用したメインプロセス間のみ適用、あなたが受けるダメージは-[Lv×5]点、このエフェクトは侵蝕率でLvUPしない、基本侵蝕+4								
フェイタルヒット	2	4+2	オート	至近	自身	自動	100%	
効果： あなたが行うダメージロールの直前に使用、そのダメージを+LvDする、1Rに1回まで								
魔獣の衝撃	3	2	メジャー	視界	—	RC	—	
効果： 攻撃力+5の射撃攻撃を行う、この攻撃の判定ダイスは+Lv個され、1R1回まで								
写真記憶	★	—	メジャー	至近	自身	自動	—	
効果： あなたが目にしたものを、その細部に至るまで詳細に漏らすことなく記憶している、必要なら<知覚>による判定								
影絵芝居	★	—	メジャー	視界	シーン選択	自動	—	
効果：任意の形や大きさを持つ影を作り出し自由自在に動かすエフェクト、あたかもその影を作り出している物体が視界外に存在するように投影することも可能、見破ろうとする場合は観察者の<知覚>とあなたの<RC>での対決								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

<FHチルドレン時代>  
 ずっと戦いの中にあっただ、それが当たり前、言われた敵を倒す…俺は誰よりも強かったから  
 そんな俺を色んな奴らが狙ってきた  
 誰もかれもが俺の力を欲しがって手を伸ばしてくる  
 その手が何より怖かった  
 逃げ切れずウロボロになって倒れた時は命を諦めたのに、それを助ける者があった  
 一色龍子(ひいろ ちょうこ)  
 俺は訳も分からず差し伸べられた手を取った  
 UGNというところは知らない、でもこいつの居るところなら…そう思っていたのに——連れて行かれたところは研究所『ユリカモメ』  
 俺は人体実験を幾度も繰り返される事になった

そうか、騙されたのか、それなら仕方ない……でも目を閉じようとしても  
 「ごめんね、ごめんねさ」  
 培養液のケースの外から聞こえる龍子の声が、何度も俺の意識を呼び戻した  
 何で謝るのかわからない、もういいのに  
 俺にとっては最早他人の全てが怖いのに、彼女の言葉には耳を傾けてしまう、もう語り掛けないでくれよ  
 そして数年後(現在から3年ほど前)、俺は彼女の助力により研究所を脱走した  
 彼女は俺の代わりに囚になり、それ以来姿を見ていない…

<脱走後>  
 《遺産》の気配がなく、自分にはどこか虚無感だけが残る中、必死に1人で隠れる様に生きていた  
 でもそんな俺に、再び手を差し伸べる者がいた